



《炭鉄港》とはほぼ時を同じくしてスタートしたまち歩き「ぶらぶら」は、《炭鉄の記憶》の原点の一つである「幌内歩こう会」(2001～2008年)の精神を引き継ぐ伝統の催事です。

今年のラインナップは、NPO役員・会員が分担し、自信をもってお勤めする空知管内15コース。参加回数に応じた、楽しい景品もご用意しています。

回	日時	自治体	テーマ
1	8/26 [土]	月形	月形に残る 知られざる宝物をぶらぶら
②	8/27 [日]	赤平	50年前の豊里炭鉱に タイムスリップ
3	9/03 [日]	夕張	丸太熊谷納豆店ファミリー ヒストリーから夕張清水沢の歴史
4	9/09 [土]	砂川	歩いて食べて スイートロード
5	9/10 [日]	歌志内	旧空知炭鉱倶楽部内部見 学と本町～上歌をぶらぶら
6	9/17 [日]	奈井江	空知の隠れた名勝に わ山から天下を眺める
7	9/23 [土]	芦別	いこしへの油谷炭鉱-油 谷展覧が夢見理想郷-
⑧	9/24 [日]	沼田	恵比島ぶらぶら +具化石を見に行く
9	10/01 [日]	(岩見沢) 万字	閉山41年目懐かしの万字・ 万字炭山-限界集落の今と昔
10	10/08 [日]	栗山	栗山町のルーツは 角田にあり
11	10/14 [土]	上砂川	上砂川のヤマの記憶を巡る -総力の発揮/責任の完遂/業績の向上
12	10/15 [日]	岩見沢	シュブンベツをめぐり 開拓の頃に想いを馳せる
13	10/21 [土]	美瑛	我路の原風景 -マイ・ウェイ-
14	10/28 [土]	滝川	人石を歩く -滝川の人造石油について
15	10/29 [日]	三笠	画期的な都市計画 -三笠市街地-

原則13:00集合だが、②10:00集合・⑧12:00集合

NPO設立10周年記念 11月5日(日)に記念行事を開催

当NPOは、6月4日で設立10周年を迎えました。1998年から続く《炭鉄の記憶》市民活動をベースに、2007年に夕張市の財政破綻を契機としてNPOを結成して以来、全力で走ってきたため、「もう10年もたつのか!」といったところが正直な感想です。これもひとえに、会員や関係機関の多大なご

支援があつてこそと、NPO役員一同、感謝申し上げます。

会員の皆さんと、この10年を振り返り、次の10年に向けての決意を新たにしたいと思い、11月5日(日)に記念行事の開催を計画しています。今のうちから、是非、ご予約を入れて頂き、ご参加下さいますようお願い申し上げます。

□記念講演会

11月5日(日) 13時頃～15時頃
マネジメントセンター
(株)島津興業尚古集成館の松尾千歳館長による薩摩の歴史についてのお話し、会員限定・参加費無料

□記念パーティー

11月5日(日) 17時頃～
ホテルサンプラザ(岩見沢市)
立食形式による記念パーティー
参加費5,000円程度
会員および管内首長など関係者



例年「線路の灯り」として実施してきた旧国鉄幌内線のロウソク点灯を、今年は旧国鉄唐松駅と住友別立坑での「炭鉄の灯り」として、7月29日に開催しました。

2003年のスタートから旧国鉄幌内線で開催してきたため、炭鉄鉄道に人々の関心を寄せてもらうためと思われがちですが、実はそうではありません。

本来この催事には、多くの人々の悲喜こもごものドラマが積層した産炭地域で、いま私たちが活動させて頂くことへの、感謝と鎮魂の意味が込められています。そのため、「観覧者が一人も来なくてもいいから、わずか10mでもいいから、灯し続けよう」という思いで、これまで途切れることなく続けてきました。

関係先の中には単なる客寄せイベントと捉えている方も出てきたことから、15回目の際して、もう一度、催事の原点に立ち返るために、今年は趣旨に相応しい場所として旧国鉄唐松駅と住友別立坑に会場を変更し「炭鉄の灯り」として開催しました。

人事異動

2015/10/28 ▷プロジェクトマネージャーを委嘱/魚崎哲二郎(北海道地域づくりサポート隊員)

2016/04/01 ▷雇用更新/秋元さなえ(事務局員、2017/03/31まで)

2016/08/01 ▷事務局長/北口博美(事務局員)
2016/09/28 ▷委嘱を解く/魚崎哲二郎(プロジェクトマネージャー)

2017/02/24 ▷通常総会で理事に選任:吉岡宏高・大橋二郎・植村真美・酒井裕司・三上秀雄・佐藤裕子・平野義文・石川成昭(再任)
▷同監事に選任:加藤倫朗・熊谷隆文(再任)

2017/02/24 ▷第2回理事会で理事長に選任:吉岡宏高(再任)▷同副理事長:大橋二郎(再任:先任副理事長)植村真美(再任)
▷同常務理事:酒井裕司(再任)

2017/04/01 ▷雇用更新/秋元さなえ(事務局員、2018/03/31まで)

2017/06/15 ▷新採用/大倉加奈(事務局員、2018/03/31まで)

2017年事務局スタッフ

吉岡理事長

会務全体の統括を行うほか、センターには行事などある際に随時在勤します。



酒井常務理事

個別プロジェクトを担当することが多く、必要に応じてセンターに在勤します。



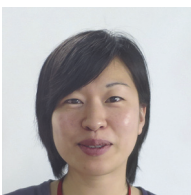
北口事務局長

マネジメントセンターに週4～5日在勤し、会務の実務全体を総括します。



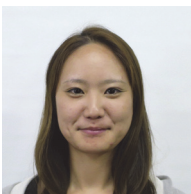
秋元事務局員

マネジメントセンターに週1～3日在勤し、センター業務を補佐します。



大倉事務局員

赤平コミュニティガイドクラブTANtanのメンバーで来年3月までセンターで研修勤務します。



佐々木尊洋さん

元事務局員で、自営事務所(STデジタルワークス)をセンターのロフトで開設。



情報

特定非営利活動法人 **炭鉄の記憶推進事業団**
理事長 吉岡宏高

〒068-0021 岩見沢市1条西4丁目3
そらち炭鉄の記憶マネジメントセンター

TEL 0126-24-9901 FAX 0126-24-9902
http://www.soratan.com/

No. 014

2017/08/15

《炭鉄港》の動きが進展

名前が先行してきた《炭鉄港》

《炭鉄港》は、近代北海道を築く基となった三都(空知・室蘭・小樽)を、石炭・鉄鋼・港湾・鉄道というテーマで結ぶことにより、人と知識の新たな動きを作り出そうとする取り組みです。

当NPOが先導し2010年から毎年続けてきた甲斐もあって、一定の認知度を得るようになってきました。一方、これまでその詳細なストーリーが一度も整理されたことはなく、漠然と《炭鉄港》という言葉が世に送り出してきた状況が課題となっていました。

ストーリーを整理する好機到来

かねてから空知総合振興局に、《炭鉄港》に関する一連の歴史的経緯を取りまとめるよう働きかけてきましたが、昨年度下期に「炭鉄港ストーリー構築事業」が公募され、当NPOが受注することで、念願の機会が到来しました。

3月末にまとめられた報告書は68頁に及び、①《炭鉄港》が生まれた背景と事業展開の経緯、②ストーリーの基本的な視点、③本編-4つのストーリー、④類似の事例をもとにした展開可能性と今後の進め方からなり、巻末には176件の歴史遺産が整理されています(▶右上バーコードを読み取りとダウンロードできます)。

今まで吉岡理事長の頭の中だけにあったストーリーを、誰にでも読める形に取りまとめたことは、今後、《炭鉄港》を展開する上で大きな力になると期待されます。

従来の《炭鉄港》ストーリー

北海道の近代化は、1872年(明治5)年、

石造埠頭の建設が開始された小樽からスタートし、1879(明治12)年、北海道初の近代炭鉱である官営幌内炭鉱(三笠市)の開鉱は小樽が飛躍する契機となりました。

石炭を運ぶ幌内鉄道は、日本で三番目の鉄道として、1880(明治13)年に手宮(小樽)～札幌間が部分開通、1882(明治15)年には幌内まで全通しました。幌内鉄道は、小樽港への石炭運搬だけではなく、内陸部へ入植する人や収穫した農産物の輸送に活躍し、道都札幌の発展を支えました。

1889(明治22)年、炭鉄と鉄道は元薩摩藩士の堀基が設立した北海道炭鉄鉄道会社(北炭)に払い下げられ、同社により空知炭鉱(歌志内)と夕張炭鉱(夕張)の開発が進められました。1892(明治25)年に室蘭まで鉄道が延長され、岩見沢が鉄道の要衝として、室蘭が石炭積出港として発展する礎となりました。

1906(明治39)年の鉄道国有化により、北炭は英国企業2社との合弁で室蘭に日本製鋼所を設立。1907(明治40)年には製鉄へと進出し(輪西製鉄:現在の新日鐵室蘭製鉄所)、室蘭は鉄の街としての不動の地位を確立しました。

一方、鉄道国有化によって北炭の独占輸送体制が崩れ、財閥各社は一斉に空知へ進出し、さらに日露戦争で獲得した樺太へと勢力を伸ばしました。このことが小樽港の一層の発展を促して、1914(大正3)年の小樽運河の開削へとつながります。

空知・小樽・室蘭の三都を結ぶ鉄道は、全道の鉄道ネットワークの機軸となり、三都の基幹産業である石炭・港湾・鉄鋼は、北海道の産業化を先導してきたのです。

新たに付加されたストーリー

さらに《炭鉄港》ストーリーは、昭和に入ってから激動の歴史を刻んできました。太平洋戦争と戦後の復興期、そして高度経済成長期まで続きます。特に1960年代以降の激変は人口の推移によく現れていま

す。小樽・室蘭は最盛期に対して2/3となり、空知に至っては1/6にまで減少し明治期の人口に戻ってしまいました。今回のストーリーでは、高度経済成長が絶頂を迎える反面、《炭鉄港》地域が下り坂へと向かう1969(昭和44)年までを取り上げました。

《炭鉄港》の意義

わが国の長い歴史の中で、わずか150年という短期間のうちに、北海道開拓のフロンティアとしての栄光というハッピーエンドで終わらずに、経済・社会の急激な変化に揺れ動いた苦闘の歴史を経験しているのも、《炭鉄港》の大きな特徴です。

このような環境激変にあたって、1980～1990年代に各地で市民主体の運動が芽生えました。端緒や展開経緯はそれぞれですが、共通しているのは足下の資源を磨き価値を創造することにあります。《炭鉄港》は、この三つの各々が、初めて一つの共通項で結ばれ「ともに事にあたる」という、画期的で実践的な取り組みです。

《炭鉄港》の足跡をたどることは、混迷を深めながら縮みつつある日本にとって、貴重な教訓を与えるものと言えます。

市町村議員連盟も発足

北海道「炭鉄港」市町村議員連盟の設立総会が、3月19日に岩見沢市で開催されました。《炭鉄港》の動きを地域に定着させる大きな力になると期待されています。

会長=植村真美(赤平市議)、副会長=安斎哲也(小樽市議)・南川達彦(室蘭市議)、幹事長=平野義文(岩見沢市議)



活動の報告・計画

報告 ■ 2016 年

設立から第 10 期めの節目である 2016 年は、そらち炭鉱の記憶マネジメントセンター(以下「マネジメントセンター」)の独自財源による運営が安定的に推移するとともに、炭鉄港や赤平立坑の保全などこれまで進めてきた取り組みの成果が現れはじまりました。

[活動計画に対して: ○=達成 △=途上 ×=未了]

■出版事業

×ブックレットの刊行: 他の業務が忙しく刊行に至りませんでした。

■炭鉱遺産事業

○石炭博物館のリニューアル計画への参画と支援: 夕張市の石炭博物館は、2016 年度に模擬坑道改修を終え、2017 年度には博物館の機能・展示の更新を行う予定です。2018 年度のリニューアルオープン後は当 NPO の積極的関与の期待が高いことから、現段階から様々な局面で関与・支援しました。

○炭鉄港キャンペーンの継続: 2010 年から展開してきた「炭鉄港」は、日本遺産への登録に向けた活動へとステップアップしつつあり、空知総合振興局の事業と連動して各方面への働きかけが進みました。空知総合振興局から「炭鉄港ストーリー構築事業」を受託し、関係自治体議員による「炭鉄港議員連盟」が結成されました。

○炭鉱遺産の保全・活用に向けた活動: 2016 年 7 月に赤平市による赤平立坑の取得が実現し、整備活用の具体策検討に積極的に関与しました。また、赤平立坑と対になって保全活用が図られるべき三笠市の奔別立坑をクローズアップするために、急遽、「そらち炭鉱の記憶アートプロジェクト 2016 (Klein)」を 10 月に開催しました。このほか、炭鉱の記憶の価値の掘り起こしのための基礎的な取り組みとして、7 月に元北炭技術職員の深井哲さんの講演会「幌内・夕張の炭鉱技術とともに働いた人たち」、9 月に「万字炭鉱写真展」、10 月に元京都大学教授の西山卯三の写真展「西山卯三が見た戦後の炭鉱」をマネジメントセンター石蔵で開催しました。また、空知総合振興局の事業に

協力して炭鉱遺産の現況調査を行いました。

■学術支援事業

○歴史的経緯を踏まえた鹿児島との交流の強化: 2016 年 2 月に(株)島津興業と空知総合振興局の連携協定が締結され、11 月には企業版ふるさと納税が決定するなど、当 NPO が媒介した鹿児島とのつながりが進展しました。連携協定の締結を記念して、2 月の締結式の後には(株)島津興業の特別協賛を得て「島津の夕べ焼酎ナイト」を開催、6 月には管内自治体に呼びかけて鹿児島をはじめ九州地区の産業遺産を視察ツアーを開催しました。

○空知産炭地域に対するリファレンス業務や史料の受け入れ保存と産業遺産活動の支援: 美唄青年会議所の「炭鉱の記憶子ども大使プロジェクト」に協力するなど、空知各地での炭鉱の記憶に関係する事業へ積極的に支援・関与しました。マネジメントセンターへの資料寄託も、依然として断続的に続いています。

■市民団体連携事業

○管内市民団体との関係強化: 活動の様々な局面を通じて、管内の他団体との関係を引き続き強化しました。市町村賛助会員の職員(主として地域おこし協力隊)を対象とした長期研修や、9 月には岩見沢市の情熱フェスティバルで「炭鉱グルメ」を開催しました。

○国内外の炭鉱遺産関係者・団体へのアピールと受入対応: マネジメントセンターには各地各所から多様な求めが寄せられ、積極的に対応しました。

■拠点施設事業

○そらち炭鉱の記憶マネジメントセンターの継続安定的な運営: 限られた経営資源の制約の中で、マネジメントセンターの開館を継続し、十全な機能を発揮することができました。2016 年 1～12 月の入館者数は 5,088 名(2015 年 4,356 名)で、その数を伸ばしつつあります。

○企画展示の充実: 前の「炭鉱遺産事業」でも述べた通り、石蔵を活用した催事を連続的に開催しました。8 月には、運営会員の溝口雅明さんが万字に開設したジンギスカン鍋の私設博物館と連動企画として「ジン鍋博物館 in 石蔵」を開催しました。今後とも、自主展示の合間に会員知見を活用した展開を模索する必要があります。

■ヘリテージツーリズム事業

×地域限定旅行業の登録の模索: 資産基準欠格の恐れがあるため、今期も登録を延期せざるを得ませんでした。今後とも財務基盤の強化を図り申請の機会を狙います。
△営業実績の積み重ね: 他社ツアーのガイド受託、各種催事・視察の手配業務などを継続的に行いました。

■会務

△賛助会員の拡大: (株)島津興業が賛助会員として 5 口加入して頂いたほか、徐々にではありますが賛助会員拡大の気運が高まりつつあります。

△会員サービスの充実: 様々な媒体を使い活動情報の発信に務めました。特にブログは、NPO の動きをリアルタイムに伝えるツールとして、広く認知され定着しています。会員に対しては、刊行物の無償配布や、会員交流会の開催などを行いましたが、引き続きサービス向上を目指す必要があります。なお、2016 年 8 月からマネジメントセンター開設時からの事務局員である北口博美さんを事務局長に任命し、活動活発化による事務負担の増大に対応しました。

×広報体制の強化: 北海道地域づくりサポート隊員がマネジメントセンターに駐在し協調展開を図ろうとしましたが、所期の成果を得ることができないと判断し駐在体制を解消しました。

○会員数: [2016 年 12 月末] 総数 = 322 名(昨年末 284 名)、運営会員 = 48 名(同 40 名)、一般会員 = 256 名(同 228 名)、賛助会員 = 18 社(同 16 社)

■ 2016/12/31 の財務状況

科目	2016 決算	
資産の部		
流動資産	現預金	1,994
	売掛金	176
	棚卸資産・貯蔵品	167
	前払費用	200
	未収収益	830
小計	3,367	
固定資産	什器備品	223
	減価償却累計額	▲223
	敷金	50
小計	50	
資産合計	3,417	
負債の部		
預り金	24	
負債合計	24	
正味財産の部		
前期繰越正味財産	3,358	
当期正味財産増加額	35	
正味財産合計	3,393	
負債および正味財産	3,417	

単位: 千円

■活動計算の 2016 年決算・2017 年予算

科目	2016 決算	2017 予算
経常収益		
受取会費	2,157	2,000
寄付金	253	200
事業収益	11,868	11,500
補助金	3,000	2,000
その他	0	0
経常収益計	17,278	15,700
経常費用		
出版事業	376	600
ツーリズム事業	342	200
遺産保活事業	3,084	3,300
学術支援事業	6,136	3,500
市民連携事業	1,238	700
拠点施設事業	5,456	6,100
その他事業	43	0
小計	16,675	14,400
管理費	480	1,210
人件費	100	800
その他経費	380	410
小計	480	1,210
経常費用計	17,155	15,610
当期正味財産増加額	124	90
法人税・住民税・事業税	90	90
前期繰越正味財産額	3,358	3,393
当期正味財産	3,393	3,393

単位: 千円

計画 ■ 2017 年

■出版事業

○ブックレット、解説資料の刊行

■炭鉱遺産事業

○赤平立坑、石炭博物館など主要炭鉱遺産の保全活用に対する積極的な関与
○小樽・室蘭との連携による「炭鉄港」の日本遺産に向けた運動の強化

■学術支援事業

○歴史的経緯を踏まえた鹿児島との交流強化
○基礎的史料の整備・公開体制の構築

■市民団体連携事業

○管内の機関・団体との連携
○国内外の関係者・団体への対応

■拠点施設事業

○そらち炭鉱の記憶マネジメントセンターの安定的な運営の継続

■ヘリテージツーリズム事業

○研修旅行など受け入れ対応

■会務

○会員サービスの充実
○広報の強化
○NPO 設立 10 周年記念の行事

主要指標の推移 ■ 2010 ～ 2016 年

2009～2013 年は、国の「ふるさと雇用事業」「緊急雇用事業」の導入が、マネジメントセンターの立ち上げに際して大きな力となりました。2014 年以降は、賛助会員(特に(株)島津興業と空知管内自治体)のご支援を得て、自立的経営へと転換することができました。

期	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
会計年	2007*	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	
損益構造 (単位: 千円)											
収益	会費	634	532	618	937	684	860	1,003	804	1,641	2,157
	寄付金	51	19	31	113	65	250	222	197	330	253
	事業収益	380	1,060	1,229	5,034	5,320	2,821	8,653	10,626	8,119	11,868
	補助金	0	500	9,360	19,411	18,890	19,845	13,815	5,240	5,500	3,000
	助成金	0	500	100	0	950	1,814	1,000	0	0	0
	その他	118	0	0	0	0	0	0	1	89	0
計	1,183	2,611	11,338	25,495	25,909	25,590	24,693	16,868	15,679	17,278	
事業費	693	2,092	9,704	20,423	23,182	20,869	17,283	16,627	15,679	16,675	
貸借残高 (単位: 千円)											
現預金残高	359	625	564	2,226	1,193	1,873	4,905	1,807	3,175	1,994	
正味財産残高	359	625	525	2,173	1,411	1,614	5,098	3,000	3,358	3,393	
会員 (単位: 人・法人) 期末在籍数											
運営会員	32	37	39	37	39	40	41	42	39	48	
一般会員	105	115	142	143	148	191	211	217	229	256	
賛助会員	0	2	2	2	2	2	2	3	16	18	

*2007 年は 7 ヶ月 補助金 = 特定の事業を対象にしたもので、助成金 = 事業を特定せず活動全般に対するもの